

No.2620

『華人のインドネシア現代史』（仮題）出版企画

神戸大学大学院国際文化学研究科 教授
貞好康志

活動の具体的成果として、学術書『華人のインドネシア現代史—はるかな国民統合の道』を、本年7月30日付で木犀社より出版刊行することができた。本書は、インドネシアへの中国系移民と子孫＝華人を焦点にすえた同国近現代史である。オランダ植民地期の19世紀末から20世紀さらに21世紀初頭の現在にわたるインドネシアを舞台に、華人の辿った歴史を、各時代の政府資料、新聞・雑誌など華人自身の出版物、フィールドワークによる聴き取り資料などをもとに再構成した。四部十章からなる論述を通して、オランダ植民地期に華人の一部に芽生えた「インドネシア志向」のナショナル・アイデンティティが、同国独立後、激動する政治環境との応酬の中で、反華人暴動などの試練を乗り越え成長してきたこと、同時に、華人問題への取り組みを契機にインドネシア・ナショナリズムそのものの成員決定原理が「血統主義」から「属地主義」に移行したことを論証した。

本書の特長はおおむね次の諸点にあると筆者としては考えている。①インドネシアの華人に関して日本語で書かれた本格的な史書としては初めてのものである。②国民統合の規範としてのナショナリズムに関わる諸思想の流れを、「血統主義」対「属地主義」の両原理の相克と止揚という統一的な視点から、一世紀余の長期的視座からとらえている。③結果として、1998年スハルト政権崩壊後のいわゆる改革期における変化の意味も的確に捉え得ている。④総数700を超える註にみられる通り、全編の記述一つ一つが上述の諸資料による論拠に支えられた、手堅い実証的研究である。

学界にとどまらず、広く一般読者にも読んで貰い、今後ますます存在感を増すであろう東南アジアの大国・インドネシアと、同国を含むASEAN全体の社会経済に重要な位置を占める華人について、理解を深める一助にして頂きたいと切望する。